

報告の成果と課題

(慶應 EU 研究会 2009 年 6 月 27 日)

EU 対外関係における文化機関の役割

譲原瑞枝

EU の文化関連政策はこれまで域内を対象としたイニシアティブが中心だったが、近年は国際関係における「ソフトパワー」としての EU の役割についての認識とともに、文化の対外的な側面が注目され始めている。ただし、文化領域での EU レベルの政策は加盟国政府や文化セクターを補完するにとどまる、とされているため、実際の活動の大部分は EU 諸機関自体が推進するというよりも、この分野に従事する様々なステークホルダーがどのように EU の対外文化関係に関わるか、によって左右される。そこで本報告では、イギリスとドイツの対外文化機関の事例を取り上げ、両機関のヨーロッパ戦略の変化と EU レベルでの文化外交の可能性との関連についての考察を試みた。特にここで注目したいのは、両機関がともに設立時から中核的なメンバーであった、EUNIC と呼ばれるネットワークである。EUNIC は国際文化交流に携わる EU 加盟国の公的な組織同士の多国間協力体制を強化することを趣旨とし、EU 委員会からも支援を受けている。各加盟国には多様な文化的、政治的伝統とそれぞれのナショナルな外交課題の存在があり、ヨーロッパの枠組みで共通のアプローチを模索するこのような動きとは必ずしも両立し得ないのではないかという疑問がわくが、本報告では、対処すべき課題の所在に応じて伝統的な二国間関係での文化交流、あるいは EU レベルでのパートナーシップ構築、といった様々な方法論が存在し、それらがヨーロッパにおいて多層的な対外文化関係を形成しつつあることを指摘した。今回の報告では 2000 年以降の動きを中心に見たが、歴史をさかのぼりより長期的なスパンで文化機関の活動と EU およびナショナルレベルでの外交政策の変化との関連性をたどる必要があると感じた。また、ドイツとイギリス以外の EU 加盟国の文化機関との比較の視点を含めることも今後の課題である。